

1

フィールドできづく、きづく ——トルコ・アレヴィーの儀礼における身体技法セマーの調査から

本稿では、「きづく（気づく）、きづく（築く）」をキーワードに、筆者の経験からトルコとオーストラリアという自文化（日本）とは異なる地でのフィールドワークについて考えます。

1 自己紹介

筆者は修士課程より、アナトリア地域（現在のトルコ共和国）のアレヴィーと呼ばれる宗教的マイノリティーの人々が儀礼の中で実践している音やセマーと呼ばれる身体動作を対象にフィールドワークをしてきました。出産育児でフィールドワーク（研究）を中断していましたが、再開するようになった頃からオーストラリアに移住したアレヴィーのパフォーマンス実践の調査を行っています。コロナウィルスの世界規模での感染拡大という状況によって再び中断しましたが、規制が緩和された2022年の夏に再開しました。

2 フィールドワークとは？

フィールドワークは、筆者の専門とする文化人類学だけではなく様々な業界、分野で使われている方法です。人類学のフィールドワークでは、ある地域の人間の文化を調べるために対象となる現地に赴き生活を共にし、その事象がどのように社会及び人々の意識に組み込まれているのかを全体論的に観察します。

人類学は植民地時代に現地のことを知るために確立してきた学問です。西洋が植民地化の対象地域について自分たちの文化の価値観で調べます。それを報告書としてまとめるのが人類学者ですが、人類学者は自ら現地に赴き共に生活していませんでした。そのような方法を覆したのがマリノフスキです。彼は自ら現地（トロブリアンダ諸島）に赴き、現地の言葉を覚え人々と長期間生活

を共にし、様々な価値観を学んでいきました。

現地次第に受け入れられるようになったら、ようやく本当のフィールドワークが始まり、儀礼にも参加できるようになっていきます。筆者も最初は見学のみ、その後参加させてもらえるようになり、最後には公演に出演しないかと打診されるようになりました。しかしセマー実践の中心的存在である師匠（ホジャ）は、生徒や関係者のそのような提案に対し、すぐには頭を縦には振りませんでした。筆者はアレヴィーでないことが明らかで、やはり自分は出演をするべきではないと決め、裏方でのサポートに徹しました。

マリノフスキの後様々な人類学者が現れ、フィールドワークも文化相対主義という視点のもと実施されますが、様々な批判・展開していきます。

さらに近年のコロナウィルスの出現後しばらくはフィールドへ入ることは困難となり、場所に関係なく情報を入手・発信を可能にするインターネットを介したデジタル・エスノグラフィー（民族誌）が様々な形で用いられるようになりました。

3 アレヴィーとは？

アレヴィーは歴史的にアナトリア地域の主に中央・東部・西部に多く居住していました。現在では大都市に多く居住しています。トルコはイスラムの国とされますが、トルコには国から宗教として認められたキリスト教徒やユダヤ教徒もおり、彼らは宗務庁から資金面で援助を受けています。しかしアレヴィーは、トルコの人口約8,500万人のうち2,000万人近くいるとされながら信仰形態が特殊であるということから認められていません。

彼らの信仰はトルコ民族が古来より信仰していたシャーマニズムの名残があり、イスラーム神秘主義の影響も受けているといわれます。男女一緒に儀礼をし、そこでは歌やそれに合わせて身体動作をします。この男女平等という信念は彼らの信仰の中心です。共和国が建国される際には、それを謳った13世紀の神秘主義者ハジュ・ベクタシュが残した文化は無形文化遺産として認められ、さらに彼を記念する祭りが政府公認となりました。

1950年代以降、トルコ社会の都市化に伴いアレヴィーも例外なく都市に移住することになります。都市移住者は相互扶助組織を創設しますがその中にはアレヴィーのものもありました。しかし組織名にアレヴィーという名前は出すことができません。その代わり彼らが信奉する聖者の名を呈し、彼らの廟の保存と移住した者同士の相互扶助を目的として協会を組織します。そこでは毎週儀礼が行われ、若い世代にセマーを教授する教室が開催されています。筆者はこのセマー教室のメンバーとして毎週末に開かれる教室に参加しながら、都市を中心にセマーの国内での展開を調査しました。

4 アレヴィーについてのフィールドワーク

筆者は修士課程入学後すぐ、トルコ音楽の専門家である指導教官が見せてくれた、先生御自身のトルコ留学中の70年代に撮影したという映像に衝撃を受けます。暗闇の中に浮かび上がるろうそくの明かりの中、民族衣装を着て恍惚とした表情でゆっくりと動き回る人々の映像で、アレヴィーが儀礼の中でセマーを回っている様子でした。当時アレヴィーの資料はほとんどなく、指導教官から1937年の英語文献を紹介されますが、それは前述のハジュ・ベクタシュという神秘主義者が作った教団に関するもので、直接アレヴィーに関するものではありませんでした。これはトルコに行くしかない、トルコ留学中の博士課程の院生を紹介していただき、その方のツテでセマーを見せてもらうことになりました。

5 フィールドワークでのきつき

筆者は学部ではピアノ演奏を専攻しており、アレヴィーに関してはもちろん人類学的な研究や調査の方法に関する知識も未熟でした。そのような状況の中、現在でも親しくしている当時17歳のセマーチュ（セマーの担い手）Yが毎週通っているセマー教室に参加するようになりました。彼女と教室のメンバー、そしてホジャから様々なアレヴィー文化を享受します。

調査開始時トルコ語がまだ流暢ではなく、自文化の価値観を背負った状態の筆者は、音楽を伴奏に一定のリズムパターンに乗せた動きをするセマーのことを、トルコ語で舞踊やダンスの意味を持つオユンという言葉で表現してしまいました。その言葉を聞いたホジャに「セマーはオユンではない」と怒られたのです。それほどまだ付き合いが長くなく、人々に尊敬されている教室の中心であるホジャに怒られただけでも非常にショックだったのですが、これはオユンではないのか、では何だろうという衝撃も同時に受けたのです。

その後もホジャはセマーを定義しませんでした。信頼関係（ラポール）を築く（きづく）と、自分自身で理解するようになっていきました。彼らはセマーを実践することを「踊る」ではなく「回る」と言います。さらにアレヴィーにとって最も重要な儀礼ジェムの中で唯一自分たちが信じる神と近づくことができる方法とされるのがセマーだと認識されていることも理解します。

さらにトルコ語も理解すると、舞踊を意味する



儀礼におけるセマー（撮影：セマーチュ Y）

「オユン」は、娯楽という意味と、さらにそこから「おもちゃ」という意味を持つオユンジャックという言葉もあることが分かります。つまり彼らにとってセマーは神への愛、信仰心を表現したものであり、「娯楽・おもちゃ」という意味を持つオユンではない。自分がいかに自文化的価値観で対象を見ていたか、気づかされることになりました。

しかし、人によってはセマーをオユンというアレヴィーもいます。特に都市でアレヴィーはイスラム教の主流派であるスンニ派やキリスト教など、様々な文化的・宗教的価値観を持った人々の中で生活しています。その分アレヴィーに対する考えも多様化します。筆者が通っていた協会の人々は都市においてアレヴィー性を保つために様々な活動をしておりアレヴィーの信仰に熱心な人であったため、「オユン」に対して敏感に反応したのです。

さらに、毎週セマー教室に通い、教室以外のセマー実践の場にも参加しセマーと一緒に回るようになると、セマーを取り巻く人々との関係も変化します。セマーチュYとは家族同士で仲よくしていましたが、他の生徒からも家族に紹介され家に招待され、彼らの生活の様々な側面を見せてもらえるようになります。さらに人間関係の悩みも相談を受けるようになりました。人類学的なフィールドワークの特徴である全体論的にセマーに近づけるようになり、調査目的であったセマーの都市内外での展開を、より全体として見るができるようになります。セマーや担い手に関心がある気持ちを態度に表す努力をしたこと、生活の中に入っていくこと、両方の相互作用で全体論的に彼らの生活におけるセマーの役割の一側面を知ることができたのではないかと思います。

その後、セマーを「踊る」のではなく「回る」という担い手の意識とセマーをどのように捉えて分析したらいいのかを深く考えるようになりました。結果、「身体技法」や「パフォーマンス」という用語を使うようになりました。

6 フィールドワークでのジェンダー

イスラームといえば厳格なジェンダー規範があるというイメージを持たれる方もいるでしょう。実はトルコは、建国以来世俗主義を謳っていることもあり、イスラーム諸国の中では宗教的規範が比較的緩い地域です。しかし、世代・地域によっては、厳格なイスラームのジェンダー規範を強く持った人々も多くいます。

筆者はフィールドワーク後半ではアレヴィー宅での生活でしたが、基本的には拠点としてアパートを一人で借りていました。しかしトルコでは女性の一人暮らしは一般的ではありません。そのため筆者は信頼関係が築かれた相手には日本人としての事情や背景なども伝えていましたが、それほど親しくないトルコ人には友人と部屋をシェアしていると伝えていました。

男女の在り方・区別は民族舞踊の形態にも表れています。トルコの民族舞踊のほぼ全てが基本的に男女別に踊られてきました。現在では西洋ダンスとの融合など様々な形にアレンジされ、男女一緒にの団体も見られます。そのような中アレヴィーは、男女平等が信仰の中心です。そのため、女性が儀礼に参加することををはじめとして、セマーも男女一緒に回られ、その他暮らしの様々な部分で男女の区別なく物事が進んでいます。

また、セマー教室は男女の出会いの場ともなっており、生徒同士が結婚をするなど、密な関係を築いていました。彼らの親がセマー教室に通う相手なら安心だと話していたのを覚えています。セマーチュYは20代前半でも結婚の気配が全くなかったため、彼女のお母さんからは「トモコも結婚しないで好きなことやっているからよ」と少し皮肉を込めて言われたのを覚えています。彼女はトルコでも最難関とされる音楽大学の民謡科に入学し、大学院まで進学しました。現在も独身を貫き民謡歌手兼研究者として活躍し、研究所勤務です。都市部には、そのような女性はたくさんいます。

イスラームの国であるトルコで女性一人での

フィールドワークでしたが、男女平等を謳うアレヴィー対象の調査だったせいも、さほどジェンダーにとらわれずに調査ができたと感じています。

7 移民の調査

筆者は、本来の実践の場とは異なる環境でのセマー実践の場を捉えるために、オーストラリアのアレヴィーの調査も開始しました。

トルコ出身者は地理的に近いこともありヨーロッパに多く移住しており、研究も多くされています。しかし、オーストラリアのアレヴィー、それもパフォーマンス実践に関する研究はほとんどありません。

オーストラリアに移住したアレヴィーたちは、トルコと同様、移住地で相互扶助や文化交流を目的に協会を設立しています。彼らに会うために、まず2泊4日という超短期間のフィールドワークを開始することにしました。その後同じ日数の調査を3回実施し、まずは顔を覚えてもらいました。また彼らは、SNSを多用しているため、投稿に対する反応は必ず行いました。学生時代とは異なる状況で新しい信頼関係を築くためにできることは可能な限り行いました。

ただ、子供を連れての調査は「ハプニング」もあります。初めてセマーに参加することになった時、同行していた娘が風邪を引きキャンセルとなりました。その時は夏休みでしたが、オーストラリアは南半球に位置し、真夏の日本から真冬のメルボルンへの移動で娘の体調管理がうまくできず、風邪を引かせてしまったのです。その後、6か月間の予定で娘を連れて長期滞在できるようになったのですが、コロナの影響で渡航ができなくなってしまいました。

しかし、コロナによって協会のメンバーも活動を模索しており、SNSを利用したセマーを含めた活動を行うようになっていました。これも彼らのアレヴィーとして生きる戦略で、重要な実践の場です。以前より筆者はフィールドワークができな

い間インターネットを利用してアレヴィーの活動を追っていたため、コロナ蔓延によりテーマとして設定することにしました。このようにオンラインをフィールドとすることは、現在では人類学はもとより様々な分野で当たり前に見られる傾向です。

8 移民に関するフィールドワークでの戸惑い

その他、移民社会でのフィールドワーク中に戸惑ったことは使用言語の問題です。もちろんトルコにいるアレヴィーはトルコ語を話します。オーストラリアは英語が公用語です。オーストラリアに住むアレヴィーもふだんは家族以外とは英語で話していますが、アレヴィー同士で話すときは家族でなくてもほぼトルコ語です。筆者はさらに外国人ということで、皆英語で話しかけてきます。フェイスブックを含めた活動もトルコ語が主でした。それならばトルコ語で調査すればよいのですが、特に若い世代はトルコ語よりも英語のほうが流暢です。このように、調査開始時はその時々で英語とトルコ語を使い分けることに、言葉がそれほど得意でなかった私は戸惑いました。

9 まとめ

これまでお話したことは、全くの異文化だからということではなく、根本的なことは同じ文化とされる日本でも、さらに芸能でなくても共通することなのではないでしょうか。どこにいても暮らしてみなければ分からないことも多く、信頼関係を築き、様々な差異に気づくことが重要です。異文化でのフィールドワークは、そのようなフィールドワーカー自身の感度がより重要になってくるのではないかと思います。

(米山知子)